

井出猪之助著『小学地理問答』とコーネルの地理書

齋 藤 元 子*

Ide Inosuke's *Shogaku-Chiri-Mondou* and Cornell's Geography Textbooks

SAITO Motoko

abstract

Shogaku-Chiri-Mondou is a geography textbook published in 1874, the year after the publication of *Chiri-Shoho* by the Ministry of Education. This paper has two purposes. The first is to clarify the source book of *Shogaku-Chiri-Mondou* and the second is to compare *Shogaku-Chiri-Mondou* with *Chiri-Shoho*.

Ide Inosuke, the author of *Shogaku-Chiri-Mondou*, wrote that he used Cornell's geography textbook(s) as source book(s). There are 6 Cornell geography textbooks, but Ide did not mention which textbook he used. This paper collates *Shogaku-Chiri-Mondou* with the 6 textbooks word-by-word and concludes the source book is *Cornell's First Steps in Geography*.

The author of this paper previously clarified that the chief original text of *Chiri-Shoho* was *Cornell's Primary Geography*, a little more advanced textbook than *Cornell's First Steps in Geography*. Although both *Shogaku-Chiri-Mondou* and *Chiri-Shoho* are based on Cornell's geography textbooks, the two Japanese textbooks have the following differences.

Shogaku-Chiri-Mondou is a 50 page book and an almost complete translation of the first 44 chapters of the original text. On the other hand, *Chiri-Shoho* is a thin 13 page booklet – an abridged translation. *Shogaku-Chiri-Mondou* follows the question and answer style of the original. But *Chiri-Shoho* converts the style into simple sentences. The differences show that the above prove *Shogaku-Chiri-Mondou* is richer in contents and a better textbook for geography education than *Chiri-Shoho*.

Key Word : *Shogaku-Chiri-Mondou*, Ide Inosuke, Cornell geography textbooks, *Chiri-Shoho*, geography education, early Meiji era

1. はじめに

日本の教育史において明治初期は、翻訳教科書時代と呼ばれ（中村 1970：49, 高祖 1976：84）、欧米の書籍を底本とする教科書が多数出版された時期であった。地理の教科書に関していえば、アメリカのコーネル（Cornell）とミッチャエル（Mitchell）の地理書¹が最も利用された（池田 1979：49）。

1874（明治7）年、大阪師範学校に勤務する井出猪之助により、コーネルの地理書を底本に掲げた『小学地理問答』が刊行された。筆者は、学制公布翌年の1873（明治6）年、文部省の指示を受けて師範学校が編纂した最初の官製地理教科書『地理初歩』が、コーネルの地理書の一冊である *Cornell's Primary Geography* を主な底本として

キーワード：『小学地理問答』、井出猪之助、コーネルの地理書、『地理初歩』、地理教育、明治初期

*人間文化研究所研究員

作成されたことを、すでに明らかにした（齋藤 2005）。『小学地理問答』は、いわば『地理初歩』と競合する形で発行された教科書である。よって、同じコーネルの地理書を底本としながらも、『地理初歩』とは異なる内容あるいは特徴を有したものであろうことが推測できる。

本論文は、『小学地理問答』の底本を明らかにするとともに、『地理初歩』との比較を試みることを目的とし、明治初頭の学制期における初等地理教科書の内容を考察したい。

2. コーネルの地理書

『小学地理問答』が底本として掲げているコーネルの地理書が、どのような教科書であったかを、まず明らかにしておく。

コーネルの地理書は、サラ・ソフィア・コーネル（Sarah Sophia Cornell）という女性地理教育者によって書かれた地理教科書である。Cornell's *First Steps in Geography* (1858) · Cornell's *Primary Geography* (1854) · Cornell's *Intermediate Geography* (1855) · Cornell's *Grammar-School Geography* (1858) · Cornell's *High-School Geography* (1856) という 5 種類のシリーズ教科書と自然地理を扱った Cornell's *Physical Geography* (1870) がある。

コーネルの地理書は、最初に Cornell's *Primary Geography* (以下 *Primary G.* と記す)、Cornell's *Intermediate Geography* (以下 *Intermediate G.* と記す)、Cornell's *High-School Geography* (以下 *High-School G.* と記す) の 3 書がシリーズとしてまず発行された。*Primary G.* は初等学校用、*Intermediate G.* は *Primary G.* 修了者用、*High-School G.* は中等学校用に書かれた。数年後に *Primary G.* よりもさらに入門的な Cornell's *First Steps in Geography* (以下 *First Steps in G.* と記す) と *Intermediate G.* の次のレベル、あるいはこれに代わるテキストとして Cornell's *Grammar-School Geography* (以下 *Grammar-School G.* と記す) が出版された。Cornell's *Physical Geography* (以下 *Physical G.* と記す) は、5 種類のシリーズ教科書とは別に、*High-School G.* と同じく中等学校向けの教科書として 1870 年に出版された。

First Steps in G. (頁数 68) は、問答法により「地球」「海洋」「島」といった地理用語の定義と地図の読み取り方を学習する 2 部構成になっている (Cornell 1876)。*Primary G.* (頁数 98) は、同じく問答法を用いて、地球の概略を学ぶ入門レッスン、自然地理に使われる用語の定義、地図の読み取り方の 3 部から成っている (Cornell 1857)。*First Steps in G.* と *Primary G.* は、内容的にかなり重複しているが、*First Steps in G.* の記述はより単純であり、平易な単語が使用されている。*Intermediate G.* (頁数 100) と *Grammar-School G.* (頁数 122) は、政治地理・自然地理・数理地理に使われる用語の定義、地図解読、世界とアメリカ国内の地誌、地図作成法などから成る (Cornell 1870, 1872)。*High-School G.* (頁数 405) は、地誌、数理地理、自然地理の 3 部から構成されている。第 1 部の地誌が大半を占め、アメリカ諸州と世界各国の自然および人文地理的特徴が記されている (Cornell 1860)。*Physical G.* (頁数 104) は、地球の概略に始まり、地形、地質、気候、動植物・天然資源の分布、人種、アメリカの自然の特徴などが論じられている (Cornell 1883)。*High-School G.* と *Physical G.* は、中等学校用に書かれたため、内容が他の 4 書に比べて、かなり高度である (齋藤 2005 : 414 – 415)。

3. 著者井出猪之助

本章では、『小学地理問答』の著者である井出猪之助について述べる。井出は、1846 (弘化 3) 年福山藩士の二男として生まれ、藩校誠之館で学んだ後、大学南校さらには慶應義塾で英学を修めた。1872 (明治 5) 年官立東京師範学校に入学し、アメリカ人スコットに師事した。1873 (明治 6) 年に師範学校を卒業し、官立大阪師範学校の教師となった。創設期から大阪府の師範教育に携わり、明治後半以降は、普通中等教育に関わった²。

井出は、『小学地理問答』のほか、『万国地誌略』(1875 · 明治 8 年) · 『日本地理書』(1876 · 明治 9 年) · 『小学科用地学総論』(1877 · 明治 10 年) · 『上等小学課書万国地理書』(1877 · 明治 10 年) など、複数の地理書を著している (海後 1966 : 500, 504, 506, 507)。『小学地理問答』が刊行された 1874 (明治 7) 年は、井出が大阪師範学校の教師となった翌年である。

4. 『小学地理問答』の内容

『小学地理問答』は、卷一・卷二の2冊からなる。卷一はコーネルの地理書を底本に掲げて、世界地理を扱っている。卷二は“大日本之部”と題して、日本地理を扱っている。

卷一の凡例には、「此書第一巻原本ハ『コルネル』氏ノ地理書ニ據テ抄譯シ第二巻本邦ニイタリテハ諸書ヨリ抄出シテ更ニ地理ヲ詳ニスルモノナリ」「第一巻原本ト次序コトナルハ亞細亞洲ヲ本トシ編輯スル故ナリ」「此書六七才ノ小学生徒ノタメニ編輯シタル書ナレバ地名ノ重出ヲハブカズシテ生徒ノ記憶ニベンナラシム」「書中○ハ問ノシルシナリ△ハ答ノシルシナリ□ハ解キ明シノシルシナリ」「此書小学生徒ノ暗記ニ備フルモノナレバ教師生徒ニムカヒテ○ノシルシノトコロヲ問ヒ生徒ヲシテ△ノシルシノトコロヲ答ヘシムルナリ」「第一巻地名ノ讀法ハオホク英語ヲ用ウト雖モ舊ク世人ノ讀ミキタリタルモノハ旧ニ依テサラニアラタメズ」(井出 1874: 凡例1-2)と、底本との相違点や対象年齢、学習の進め方などが詳細に説明されている。この凡例を要約すると、『小学地理問答』卷一は、コーネルの地理書をアジアを中心に再編集した小学低学年向けの問答集ということができよう。

卷一は、和紙50枚を半折にして綴じた五十丁の書で、44单元から構成されている(表1)。大きく2部に分けられ、前半の第一回から第十六回までは地球・地理・東西南北・海洋・島といった地理用語の定義を学び、後半の第十七回から第四十四回は地図の読み取り方や地誌を学習する。

表1 『小学地理問答 卷一』の内容

学習回	内容	学習回	内容
凡例		十七～十八	東半球
一	地球、地理	十九～二十	西半球
二	地図、東西南北	二十一～二十五	アジア
三	北東・北西・南東・南西	二十六～二十八	アフリカ
四	水と陸・半球	二十九～三十五	ヨーロッパ
五	大陸	三十六～四十	北アメリカ
六	五大陸	四十一～四十四	南アメリカ
七	海洋		
八	島、半島、地峡		
九	岬、山		
十	海、港、湾、海峡		
十一	湖、河川		
十二～十六	一～十一の復習		

井出(1874)より作成

各回とも、凡例にある通り、○・△・□で示された問答と解説に従って学習が進行する。第一回は「○この地球は、何であるや、△地球は、人民の居住する所の、遊星なり、○地球の形は、如何なるや、△地球の形は、殆んどまるくして、橙子の如し、」(井出 1874:1)という問答で始まっている。学習の大部分は、○と△の問答で進められ、□の解説は、各回のまとめや第十二回から十六回の復習で示されている。

地理用語の定義を学習する前半部分は、問答に合わせて、「世界の水と陸との図」・「世界大陸の図」・「世界大洲と大洋の図」や島・大陸・半島・地峡・岬・山脈・海・湾・海峡・湖・川・東西南北を描いた図によっても、用語が説明されている。

地図の読み取り方を学ぶ後半部分は、東西両半球とアジア・アフリカ・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカの地図を見ながらの問答である。例えば、第二十一回のアジアでは「○亞細亞の界は、如何なるや、△亞細亞の北は北氷洋、東は太平洋、南は印度洋、西はアフリカと欧羅巴也、○シベリアは何處に有や、△シベリアは亞細

亞の北の部分に在、(中略) ○シベリアの西は、何と云ふ國が在や、○ヒンドスタンは何處に有や、」(井出 1874: 21) といった問答が続いている。各回とも、はじめは○と△が対になっているが、終盤には○の問い合わせが記され、△の答えは、先の問答あるいは掲載図の中から、学習者が自力で見つけ出すようになっている。

総頁数五十丁のうち、前半部分の地理用語の定義が十四丁、残りは地図の読み取り学習に当てられている。つまり、『小学地理問答』は、問答を通じて、まず地理用語の基本を学んだ後、さらに地図の読み取り方を訓練していく地理教科書となっている。

5. コーネルの地理書との関係

『小学地理問答』は、6・7歳の子どもを対象としているので、第2章で紹介した6種類のコーネルの地理書のうち、対象年齢が一致する *First Steps in G.* あるいは *Primary G.* を底本としたという推測が成り立つ。しかし、筆者が明らかにしたように、同じ6・7歳を対象とした『地理初歩』では、より上級用の *Intermediate G.* と *Grammar-School G.* からの引用も認められた(齋藤 2005)。そのことを踏まえて、本研究でも、*First Steps in G.* と *Primary G.* を中心に、6種類のコーネルの地理書と『小学地理問答』との比較を試みた³。その結果、『小学地理問答』は、*First Steps in G.* との一致が認められた。

First Steps in G. は、第2章で示したように、段階別シリーズ教科書の最初の入門書である。74のレッスンから構成され、問答法により、地球・海洋・島といった地理用語の定義と地図の読み取りを学習する2部構成になっている(表2)。

表2 Cornell's *First Steps in Geography*の内容

レッスン番号	学習事項	レッスン番号	学習事項
1	地球、地理	17～18	西半球
2	地図、東西南北	19～20	東半球
3	北東・北西・南東・南西	21～25	北アメリカ
4	半球	26～29	南アメリカ
5	大陸	30～36	ヨーロッパ
6	五大陸	37～41	アジア
7	海洋	42～44	アフリカ
8	島、半島、地峡	45	英國領アメリカ
9	岬、山	46～47	アメリカ合衆国
10	海、港、湾、海峡	48～51	東部諸州
11	湖、河川	52～55	中部諸州
12～16	1～11の復習	56～63	南部諸州
		64～69	西部諸州
		70～72	準州
		73	46～72の復習
		74	オセアニア

Cornell (1876) より作成

『小学地理問答』は、*First Steps in G.* のレッスン1からレッスン44までの内容に相当する。しかし、レッスン21から44とは、順序が異なっている。*First Steps in G.* では、北アメリカ・南アメリカ・ヨーロッパ・アジア・アフリカの順に学習するのに対して、『小学地理問答』では、北アメリカ・南アメリカとアジア・アフリカとが入れ替わっている。

『小学地理問答』と*First Steps in G.* の問答を一文ずつ照合してみると、『小学地理問答』には、*First Steps in G.* の問答の一部省略や□の解説における記述変更が認められる。しかし、それらは全体的に見ると、ごくわずか

で、*First Steps in G.* のレッスン 44 までをほぼ全訳しているといえる。

問答法のスタイルも忠実に踏襲されている。問答の問い合わせ(○)のみで答え(△)がない箇所は、*First Steps in G.*においても、問い合わせの文章だけが記されている箇所であり、底本に従つたものである。コーネルが一部の答えを記さなかつたのは、ある程度問答に慣れてきた学習者に自分で答えを見つける努力をさせるためであったと思われるが、『小学地理問答』も、答えを加筆せずに、コーネルの意図を継承している。

『小学地理問答』の著者井出は、先に示した凡例において、アジアを中心とする内容へと原本を再編集したことと断っている。それは、*First Steps in G.* のレッスン 21 から 44 の順序を入れ替え、アジアを最初に配置したことによどまらない。アジアを中心とすべく、以下の三点の記述変更もなされている。

①東西大陸について学習する *First Steps in G.* のレッスン 5・6 と『小学地理問答』の第五回・第六回を比較すると、*First Steps in G.* がアメリカの位置する西大陸を先に取り上げているのに対して、『小学地理問答』ではアジアの位置する東大陸から始まっている。

②*First Steps in G.* では東大陸はヨーロッパ・アジア・アフリカによって構成されていると記しているのに対して、『小学地理問答』ではアジア・アフリカ・ヨーロッパと語順を入れ替え、アジアを最初に記している。

③海洋について学ぶレッスン 7 と第七回では、*First Steps in G.* の “In what direction from North America is the Arctic Ocean? (北アメリカから見てどちらの方角に北極海はあるか?)” (Cornell 1876: 8) という質問の箇所が、『小学地理問答』では「亜細亜から何れの方に太平洋はあるや」(井出 1874: 7) となっており、アジアを起点とする問答に書き換えられている。

First Steps in G. における日本に関する記述は、以下に示すように、ごく僅かである。にもかかわらず、井出はほとんど加筆をしていない。1 箇所の変更と 1 箇所の加筆が認められたにすぎない。

First Steps in G. の日本に関する問答は、4 つ存在する。レッスン 19 の東半球の学習における “What two groups of Islands are east of Asia? The Japan and Philippine Islands. (アジアの東にある二つの島嶼群は何か? 日本とフィリピンである。)” (Cornell 1876: 19) という問答と、レッスン 37 から 41 のアジアの学習における “What three countries border on the Pacific Ocean? Siberia, Japan, and the Chinese Empire. (太平洋に面している 3 つの国は? シベリア、日本、中国である。)” “Where are the Japan Islands? The Japan Islands are east of the Chinese Empire. (日本列島はどこにあるか? 中国の東にある。)” “What Sea is west of the Japan Islands? The Sea of Japan. (日本列島の西にある海は? 日本海である。)” (Cornell 1876: 35-37) という 3 問答、合計で 4 つの問答である。

『小学地理問答』で変更されている一箇所は、この 4 問答のうち、太平洋に面する 3 国の問答である。太平洋に面する 3 国の問答は「○太平洋に界したる二つの國を何といふや、△シベリア、支那、」(井出 1874: 12-13) となっており、日本が問答から除外されている。井出が日本を外したのは不可解であるが、レッスン 19 の問答との関連から、太平洋上の島嶼群のうち、日本だけを加えて、フィリピンを無視するのは不自然であると考え、井出は島国を除外し、アジア大陸に位置する国のみを取り上げたのではないかと推測する。

日本に関して、井出が加筆を行っているのは、アジア諸国の産物に関する箇所である。*First Steps in G.* のレッスン 41 (Cornell 1876: 37) では、シベリア・中国・インド・アラビア・トルコ・ペルシャの産物を取り上げており、日本に関する問答はない。しかし、井出は最後のペルシャに続けて「○大日本の名産は、何であるや、△米、茶、蠶、」(井出 1874: 26) と、日本の産物を加筆している。日本地理に関しては、卷二で学習することになってはいるが、他国との比較という点において、井出は加筆を行ったと考えられる。

First Steps in G. には、地理用語や各大陸を示す地図と銅版画の挿絵が掲載されている。『小学地理問答』では、このうち、レッスン 44 までのすべての地図と 3 点の挿絵が模写されている。挿絵は、教師が子どもたちに世界地図を示している絵(図 1)・地球の絵・子どもが両手を広げて東西南北を体得している絵(図 2)⁴の 3 点である。

『小学地理問答』と *First Steps in G.* との比較の結果、『小学地理問答』は、*First Steps in G.* のレッスン 44 までをほぼ全訳し、全地図と 3 点の挿絵を模写し、アジアを中心に再編集した書であることが明らかとなった。

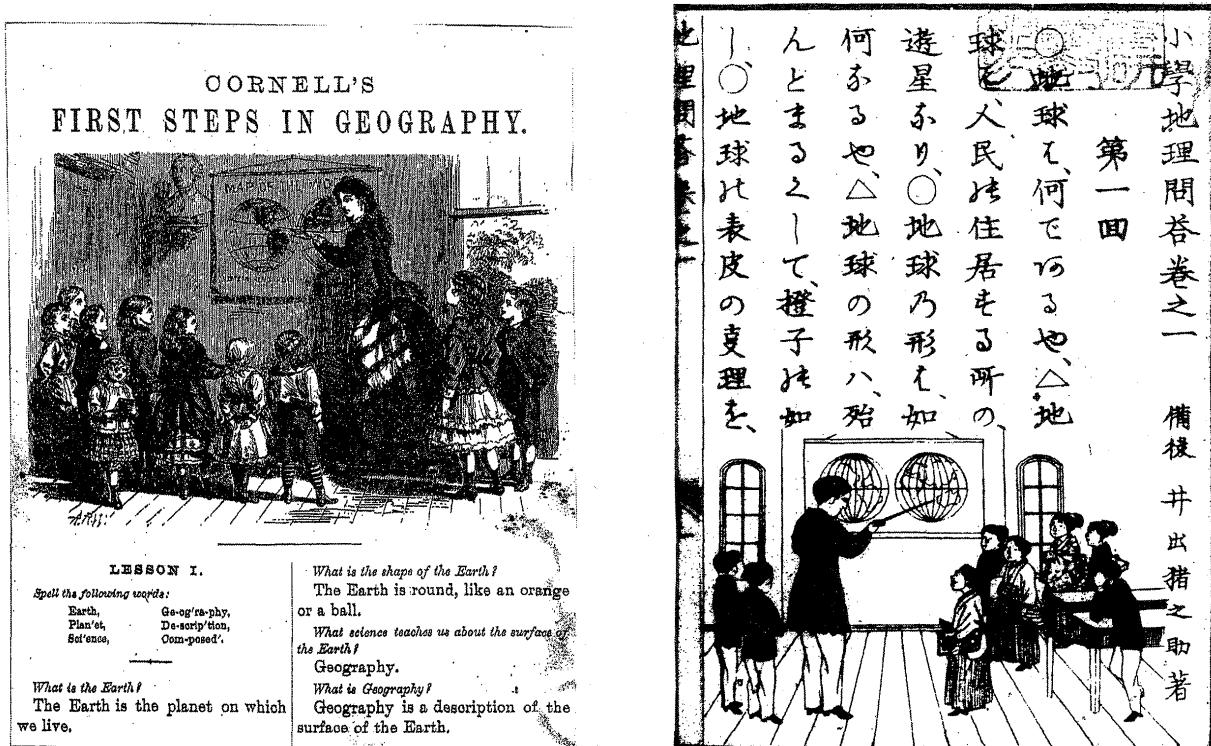


図1 Cornell's *First Steps in Geography* (左)と『小学地理問答』(右)の教師が生徒に世界地図を示している挿絵

Cornell (1876: 3)・井出 (1874: 1) より

First Steps in G. の女性教師が、『小学地理問答』では、男性教師に変更されている。

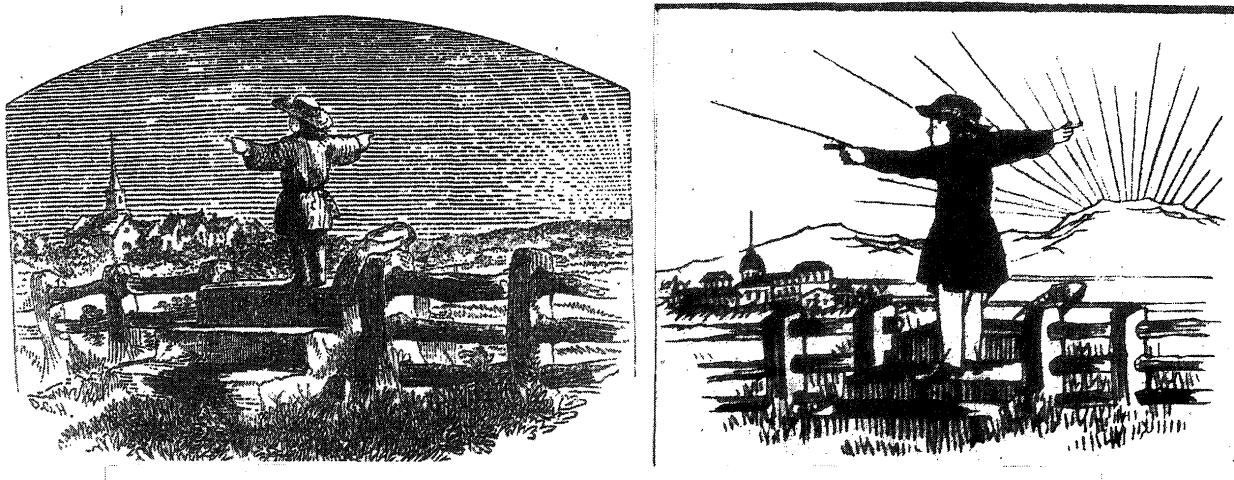


図2 Cornell's *First Steps in Geography*(左) と『小学地理問答』(右) の方位学習用の挿絵

Cornell (1876: 15)・井出 (1874: 14) より

6. 『小学地理問答』の問題点

First Steps in G. は、添付されている地図に関する様々な問答を繰り返すうちに、地図の読み取り方を自ずと習得できるように考案された教科書である。そのレッスン44までを全訳した『小学地理問答』も、当然ながら、同様の学習効果が期待できる。ところが、『小学地理問答』では、*First Steps in G.* とは異なり、問答がスムーズに進行し得ない状況が発生している。というのは、『小学地理問答』が模写した地図には、原図にある地名が完

全には記入されていないからである。例えば、*First Steps in G.* のアジアの学習の中に、“What Sea is north of Turkestan? The Aral Sea. (トルキスタンの北にある海は何か？ アラル海である。)” (Cornell 1876: 37) という問答がある。添付のアジア地図を見ると、トルキスタンの北には、アラル海の名称が記されている。ところが、『小学地理問答』では、「○トルキスタンの、北にある海は、何と云ふや、△アラル海、」(井出 1874: 25) という問答に対して、添付のアジア地図にはアラル海の形は描かれているものの、名称が記されていない。よって、地図からアラル海を見つけ出すことは不可能である。このように、学習者が本書の地図上でその存在を確認できない問答が、アジアのみならず、全ての大陸の問答において、複数存在する。

特に問題が大きくなるのは、学習者が答え (△) を自力で地図から探し出すケースにおいて、答えとなる地名が記されていない場合である。例えば、*First Steps in G.* の北アメリカの学習の中に、“What Mountains are in the eastern part of the United States? (アメリカ合衆国東側にある山脈は何か？)” “What Mountains are in the western part of the United States? (アメリカ合衆国西側にある山脈は何か？)” (Cornell 1876: 21) という問い合わせがある。答えは記されていないが、添付の北アメリカ地図を見ると、先のレッスン9で学んだ山脈の地図記号とともに、東側にはアリゲニー山脈、西側にはロッキー山脈が示されており、地図から解答を得ることができる。一方『小学地理問答』では、「○合衆國の東部は、何と云ふ、山があるや、」「○西部にある山を、何と云ふや、」(井出 1874: 42) という質問があるが、添付の北アメリカ地図には、山脈の地図記号が描かれているのみで、その名称は記入されていない。したがって、学習者が解答を見つけ出すことは不可能である。

江戸時代から続く日本の精巧な版画技術を考えれば、地図の複製において、細かい地名を漏らさず書き入れることが困難であったとは、考えにくい。井出は、冒頭の凡例において「此書六七才ノ小学生徒ノタメニ編輯シタル書ナレバ地名ノ重出ヲハブカズシテ生徒ノ記憶ニベンナラシム」と述べ、重複の手間を惜しまず、底本の問答の忠実な翻訳を実施している。にもかかわらず、地図上的一部の地名が欠落していることを見逃してしまったために、学習者が地図の読み取り方を習得することを難しくしている。

7. 『地理初步』との比較

『小学地理問答』は、はじめに述べたように、師範学校編纂の『地理初步』が文部省より刊行された翌年の1874(明治7)年に出版された。『地理初步』は府県による翻刻版が多数作成され、その数は1874(明治7)年の時点で、15万4千部を数えた(中川 1978: 63)。つまり、『小学地理問答』は、『地理初步』という官製教科書が広く普及しつつあった状況下において、出版されたものである。

『小学地理問答』の著者井出が東京師範学校において師事したアメリカ人スコットは、『地理初步』の底本選定に関与した人物である(斎藤 2005: 423)。井出は、その経歴から推測して、『地理初步』の内容を熟知した上で、その不足や不適切と感じた点を改善すべく、『小学地理問答』を執筆したと考えられる。

学制期の教科書政策は、官製教科書が作成されていても、その使用を府県に強制するもではなかった。民間の教科書著述にも制限はなく、文部省は「文部省報告課編纂書籍取扱心得」において「世上教科書ヲ著譯セント欲スル者アルハ文部省ノ最期望スル所ナリ」(中川 1978: 66)との見解を発し、むしろ奨励をしていた。したがって、師範学校の教師である井出が、既存の教科書に代わる教科書を出版することも自由であったと思われる。井出が『地理初步』のいかなる点に批判的であったかを明らかにするために、『地理初步』と『小学地理問答』の比較をしてみたい。

まずは底本に関しては、『地理初步』は既述したように、コーネルの *Primary G.* を主な底本として作成された。正確には、*Primary G.* の最初の部分である地球の概略と地理用語の定義に加えて、地球の大きさや地理学の種類、緯度・経度、赤道、気候帯など *Primary G.* では学習しない内容を、*Primary G.* の上のレベルの教科書である *Intermediate G.* と *Grammar-School G.* から引用して挿入している(斎藤 2005)。これに対して『小学地理問答』は、*Primary G.* よりもさらに入門的な教科書である *First Steps in G.* のみを底本としている。

次に文体に関しては、『地理初步』は、*Primary G.* の問答形式を採用せず、全て平叙文で書かれている。一方、『小学地理問答』は、*First Steps in G.* の問答を忠実に訳出している。

最後に内容量に関しては、『地理初步』が、地理の基礎概念のみを扱った十三丁の小冊子であるのに対して、『小

学地理問答』は、『地理初歩』の4倍近い五十丁の頁数があり、地理の基礎概念を示した後に、その応用として、地図を参照しながら五大洲の地誌を学ぶ頁が全体の7割以上を占めている。

以上述べたように、『地理初歩』と『小学地理問答』は、底本・文体・内容量の3点において、大きな違いが認められる。『地理初歩』は、*Primary G.* をはじめとする複数のコーネルの地理書を抄訳した地理用語の小冊子であるのに対して、『小学地理問答』は、*First Steps in G.* をアメリカ合衆国諸州とオセアニアの部分を除いて全訳した地理の問答書ということができる。

8. おわりに

前章で明らかにした『地理初歩』と『小学地理問答』の違いから、井出が『小学地理問答』を執筆した動機を、最後に考えてみたい。

まず、井出は、『地理初歩』に対して、6・7歳の子どもの教科書としては難解すぎるという印象を抱いていたと考えられる。『地理初歩』は、*Primary G.* に加えて、より上級レベルの教科書である *Intermediate G.* や *Grammar-School G.* をも用いている。『小学地理問答』は、6・7歳の子どもにも理解できる教科書を作成するという意図に基づき、最も入門的な地理書である *First Steps in G.* をできるだけ忠実に翻訳したと考えられる。

『地理初歩』は底本の問答を簡潔な平叙文に書き改めているが、『小学地理問答』は問答法をそのまま利用した。それは「此書六七才ノ小学生徒ノタメニ編輯シタル書ナレバ地名ノ重出ヲハブカズシテ生徒ノ記憶ニベンナラシム」との井出の言葉が示すように、幼い子どもには問答法による反復的な学習が有効であるとの考えがあったからであろう。

また、『小学地理問答』には、五大洲の地誌という『地理初歩』にはない内容を含んでいる点であるが、それは以下に述べる状況が影響していると考えられる。『地理初歩』刊行の翌年 1874（明治 7）年、文部省は『地理初歩』と同じく師範学校の編纂により『日本地誌略』・『万国地誌略』⁵ という 2 冊の地理教科書を刊行している。『万国地誌略』は、米国コルトン (Colton) の『学校地誌』と米国ミッチャエル (Mitchell) の『近世万国地誌』を抄訳し、英国ゴールドスミス (Goldsmith) の『地誌』・『連邦地誌』などを参照して編集された（師範学校 1880：凡例）。つまり、『地理初歩』・『日本地誌略』・『万国地誌略』の文部省三部作は、『小学地理問答』卷一・卷二と内容的に重なる。

しかし、学習する順序には明らかな違いがある。文部省は、低学年から高学年へ、三部作を『地理初歩』・『日本地誌略』・『万国地誌略』の順序に学習させる方針を示した（海後 1966：589）。師範学校が 1873（明治 6）年 5 月に作成した「改正下等小学教則」には、『地理初歩』が第六級、『日本地誌略』が第五級・第四級、『万国地誌略』は第三級から第一級の教科書として掲げられている（古賀 1994：194－197）。下等小学校は 4 年制で、一学年を二級に分け、八級から 4 年間で一級まで進む仕組みであった。第六級で『地理初歩』を学んでから第三級で『万国地誌略』を学ぶまでには、一年の間がある。『地理初歩』で習得した東西両半球や五大洲の概念を『万国地誌略』の学習開始時まで記憶している子どもは多くないであろう。井出は、日本地誌よりも世界地誌を先に学習させることにより、それらの概念をより効果的に応用できると判断したのではないであろうか。それゆえに、文部省とは異なる学習順序を組み、世界地誌を卷一、日本地誌を卷二に配した『小学地理問答』を作成したと考えられる。

さらに、井出が *First Steps in G.* を底本として選択したのは、上述したように、6・7歳の子どもにふさわしい最も入門的な教科書であったことに加えて、師範学校編纂の『万国地誌略』にコーネルの地理書が利用されていないことも影響したと思われる⁶。『万国地誌略』は 1874（明治 7）年 4 月（中川 1978：59）、『小学地理問答』は同年 5 月（井出 1874：凡例 2）と、ほぼ同時期に発行されているが、前年 1873（明治 6）年 5 月に作成された師範学校の「改正下等小学教則」には、『万国地誌略』の使用がすでに明記されている（中川 1978：55-56）⁷。この時、井出はまだ学生として師範学校に在籍⁸していたので、『万国地誌略』に関する情報に触れる機会があったであろう。『地理初歩』と『万国地誌略』の組み合わせは、異なる底本を使用して、外国地理の概念とその応用を学ぶ形になっている。これに対して『小学地理問答』卷一は、*First Steps in G.* のみを底本としたことにより、概念から応用へと進む学習の流れにより一貫性があったとみなすことができる。

『小学地理問答』は、大阪の文敬堂より出版されたが、同書が『地理初歩』と伍して、全国的にどの程度普及

したかは、今後の調査課題としたい。

注

- 1 コーネルとミッケルの地理書は、ともに19世紀後半のアメリカに広く普及した地理教科書で、初等から中等教育用の段階別シリーズ教科書である。
2 www.fuchu.or.jp/~sei-dou/jinmeiroku/ide-inosuke
- 3 比較は、コーネルの *First Steps in G.* (1876・第2版)、*Primary G.* (1857・第2版)、*Intermediate G.* (1872・第2版)、*Grammar-School G.* (1870・第2版)、*High-School G.* (1860・第1版の重版)、*Physical G.* (1883・第1版の重版) により行った。
- 4 方位学習の絵は、『地理初步』にも取り上げられている（斎藤 2005：422）。
- 5 『万国地誌略』も、『小学地理問答』と同様に、アジアを最初に取り上げ、筆頭に日本を配して「日本地誌略ニ詳ナルヲ以テ、之ヲ錄セズ」（師範学校 1880：1）と説明している。
- 6 井出は、1875（明治8）年官製教科書と同じタイトルの『万国地理略』を出版している（海後 1965：504）。井出の『万国地理略』は、師範学校編纂のものとは異なり、ミッケル、ゴールドスミス、コーネルなどの地理書を底本としている（井出 1876：上巻凡例）。『万国地理略』というタイトルの地理教科書は、このほかにも、菅野虎太（1874年）、藤井惟勉（1875年）、古川良輔（1876年）によるものが刊行されている（海後 1965：504 - 506）。
- 7 中川（1978：57）は、未刊行の『日本地理略』・『万国地理略』が1873（明治6）年の「改正下等小学教則」に示されているのは、刊行を予定しての措置なのであろうかと述べている。
- 8 井出は、1873（明治6）年7月に、東京師範学校を卒業し、8月に大阪師範学校の教師となった。www.fuchu.or.jp/~sei-dou/jinmeiroku/ide-inosuke

文献

<史料>

- 井出猪之助 1874. 『小学地理問答 卷一』文敬堂.
井出猪之助 1876. 『改正万国地誌略』竜草堂. (初版1875年)
師範学校 1873. 『地理初步 全』文部省.
師範学校 1874. 『日本地誌略』文部省.
師範学校 1880. 『万国地誌略』文部省. (初版1874年)
Cornell, S. S. 1857. *Cornell's Primary Geography*. New York : D. Appleton and Company. (1st edition in 1854)
Cornell, S. S. 1860. *Cornell's High-School Geography*. New York : D. Appleton and Company. (1st edition in 1856)
Cornell, S. S. 1870. *Cornell's Grammar-School Geography*. New York : D. Appleton and Company. (1st edition in 1858)
Cornell, S. S. 1872. *Cornell's Intermediate Geography*. New York : D. Appleton and Company. (1st edition in 1855)
Cornell, S. S. 1876. *Cornell's First Steps in Geography*. New York : D. Appleton and Company. (1st edition in 1858)
Cornell, S. S. 1883. *Cornell's Physical Geography*. New York : D. Appleton and Company. (1st edition in 1870)

<参考文献>

- 池田哲郎 1979. 『日本英学風土記』篠崎書林.
海後宗臣編 1965. 『日本教科書大系 近代編 第十五卷 地理（一）』講談社.
海後宗臣編 1966. 『日本教科書大系 近代編 第十七卷 地理（三）』講談社.
高祖敏明 1976. 明治初期翻訳教科書に関する一考察 - 青木輔清編「小学教諭民家童蒙解」の原書をめぐって-. 上智大学教育学論集 11: 84 - 101.
吉賀徹 1994. 東京師範学校附属小学教則と米国サンフランシスコ公立学校カリキュラムとの比較考察. 教育学雑誌 28: 191 - 207.
斎藤元子 2005. 師範学校編纂『地理初步』とその底本. 地理学評論 768 - 6: 413 - 425.
中川浩一 1978. 『近代地理教育の源流』古今書院.
中村圭吾 1970. 『教科書物語 - 国家と教科書と民衆 -』ノーベル書房.

(2006年12月1日受理)